月例研究発表要旨

第223回　2005年5月25日
「現代中国における
　農村自治の存立構造」

南　裕子

1. はじめに

改革開放期（1980年代以降）の中国農村社会を，自治の生成・展開の場としてとらえた場合，その自治の存立構造にはどのような特徴が見られるのかをテーマに報告を行った。

まず，自治の存立構造の捉え方であるが，これを外部構造と内部構造からなるものとした。外部構造とは，外部（上位）権力との関係構造を意味するもので，この関係構造から自治の余地を考察する。そして内部構造は，地域共同性のあり方に関するもので，地域住民の共同行為がいかに組織化されているのかを問題とし，共同の契機，自治の主体に着目した。

なお分析の対象は村レベルとした。中国の地方行政機構は，省－市－県（市）－郷・鎮となっており，郷鎮の下に，法律上自治組織とされる村レベル（村民委員会）が存在する。2003年末の村民委員会数は67.9万，同年の農家世帯数は2.48億戸なので，平均すると1村の規模は365世帯ということになる。

2. 自治の外部構造

村レベルの自治は，「村民委員会組織法」に規定される村民自治制度によって法的な保障をもつ。そして，90年代後半からは，村民委員会組織法の改正，選挙・村務公開等にかかわる通達など，村民自治制度を現実に根付かせようとする措置が展開された。即ち自治の余地は制度的には拡大傾向にあり，村民が自分の村の意思決定に関与し，自らの決定で共同行為を行う可能性が開かれ，またそうするよう促されていた。

だが一方で，この時期は，農業・農村・農民のいわゆる三農問題が広い範囲で深刻化し，政策課題となっていた時期でもある。なかでも農民負担の問題は，村レベルの自律性の侵食，村内の共同性の基盤となる幹部と村民関係の悪化を引き起こすものであった。その背後には，圧力型体制とよばれる地方統治構造の問題が存在する。郷鎮レベルにかかる上級からの圧力は，行政組織ではなく自治組織とされる村レベルにも転嫁されることになる。郷鎮政府は自らの任務達成のために，村民自治制度の一方で，村レベル（村幹部）をその代理機構・代理人とするべく各種の統治手段を用いているのである。

3. 内部構造

村がどのような共同の場であるのかを見ると，制度上の期待と現実のギャップが今日顕著になっている。村民自治制度は政府の公共投資の負担軽減という側面ももち，人民公社の延長であるかのように多機能包括的であることが求められている。これは国家により目的化された共同性ともいえるものである。しかし，近年の調査によれば，フォーマルな組織による公共財提供機能の低下が窺われる。

また，中国農村の村落構造に関する既存

研究で指摘されているように，フォーマルな組織により公共財サービスがなされているように見えても，実際は，幹部の職にある実力者の個人的価値観，状況主義的な動きによることも多い。このため，ここで生じる共同性は，実力者が影響力をもつ私的空間におけるものであり，地域全体で見た場合に，恒常性や公平性の問題を残すこととなる。

こうした状況の一方で，近年，いわばインフォーマルな制度が主体となった共同性が創出され，村の公的組織と協働する地域も出現している。この背後には，改革開放以降の農村における社会空間の拡張をうかがうことができる。それは，伝統的な紐帯（親族関係や民間信仰）が復活し活動することを可能とする社会空間や，幹部以外の実力者（主として経済力を蓄えた人物）が村民を組織化することを可能とする社会空間である。

4. おわりに

以上のような外部構造と内部構造に規定されて，現在は，下からの共同性の立ち上がる地域と農民の原子化が進行する地域の差が拡大する傾向にあることが窺える。こうした状況で展開される農村自治の差異は，具体的には公共財の供給という形で今日の農村部の人々の生活条件を左右するものとして極めて重要な問題となる。

だがその一方で中，長期的に見れば，近年の農村政策において農村部への財政投入の増大がはかられていることから，公共性創出の単位が村から郷鎮レベルへと移行し，村レベルの自治のあり方に根本的な変更をもたらす可能性も考えられる。

第224回　2005年7月20日
「マライア・エッジワース『倦怠』(1809) の処方箋――専門教育と理想のパトリオット創出」

吉野由利

英語で書かれた「ネイションの物語 (national tale)」のジャンルを開拓したとされる，アングロ＝アイリッシュ系作家マライア・エッジワースのアイルランド小説第2作に関して発表しました。加筆修正したものを『言語文化』第42巻 (2005) に掲載させて頂きましたのでご高覧頂ければ幸いに存じます。

第225回　2005年10月19日
「20世紀初頭にハノイで発行された新聞についての予備的考察」

岩月純一

近代ベトナムにおいて，漢文とチュノム（擬似漢字によるベトナム語表記）からクォックグー（ローマ字表記ベトナム語）へという書記言語の転換が可能となった要因の一つとして，新聞・雑誌の変容があげられる。本報告では，新聞・雑誌変容のターニングポイントとなった20世紀初頭のハノイに焦点を当て，現存する希少な史料から，変容の実相とその背後にある「言語意識」の一端を明らかにしようとする試みをおこなった。

前近代ベトナムにおいては，広汎な読者層を持つ新聞発行の伝統がなかったため，新聞印刷の技術もフランス植民地政庁によ

って持ち込まれたものが最初であり，初めて発行された新聞も植民地政庁の官報であった。また植民地支配が南部コーチシナ地方から始まったため，新聞の発達は南部において先行した。言い換えると，近代初期のベトナムにおける新聞の発達は，少数の例外を除いてフランス語とクォックグーの普及というフランスの言語政策と完全に連動しており，植民地支配の進行とともに，クォックグー，ついでフランス語のマスメディアによって，地域と階層を超えた新しい共同意識が徐々に発達していった。

ただしフランスも，漢文のみを解する在来の官僚・知識人が掌握していた地方統治機構の協力なくしては安定した支配を確立できなかったため，特に統治の初期においては漢文の官報を発行した。直轄支配による急速な同化政策を強行したコーチシナでもタイトルが『Bulletin des Communes』(1862年～？）と仏訳される漢文紙があったと伝えられているが，宮廷と地方統治機構を温存する間接支配をしいた北部トンキンでは，1888年にはじめて『保護南民』と題する漢文紙を発行したとされ，さらに1891（？）年には『大南同文日報』の創刊が許可された。『大南同文日報』は民間の印刷業者Schneiderに与えられた免許に基づく民間紙の形式をとっていたが，免許は独占的であり，紙面の内容などをみると実質的には漢文版官報の役割を果たしていた。フランス語紙はもっぱらフランス人向けに編集されており，『大南同文日報』は当時ベトナム人向けに発行された唯一の定期刊行物であったといえる。

これに対し，1905年にErnest Babutが発刊した民間紙『大越新報』は，漢文に加え，北部で初めてクォックグー版を見開きに並立させる二言語形式を採用し，さらに1907年に『大南同文日報』の免許を継承して創刊された『燈鼓叢報』も同型の組版を採用した。『燈鼓叢報』の実質的な編集・発行を担ったのは同年ハノイに開校した「ドンキン義塾」を支えた民族主義的なベトナム人グループだったといわれており，ベトナム人のクォックグーに対する認識が変化したことを示す事実のひとつだと考えられる。

『燈鼓叢報』は，おそらく「ドンキン義塾」閉鎖命令に代表される植民地政庁の弾圧によって廃刊され（現存最後の号は1907年11月14日付），ほぼ同時（1908年4月26日付）に『大越新報』も「読者の少なさ」「財政的困難」を理由に休刊し，その後のハノイでは『南越官報』(1907—1908）とその後継紙『南越公報』(1908—1912？）という正式の官報しか刊行を許されなかった。しかし，このうち『南越公報』がやはり漢文とクォックグーの二言語形式であったことからもわかるとおり，1907年をはさむわずか数年の間に，ハノイ知識人のクォックグー認知度は劇的に上昇した。1913年に創刊された『インドシナ雑誌』と『中北新聞』には漢文版がなく，1917年創刊の『南風雑誌』はなお二言語版だったものの，20年代後半以降は実質的にクォックグー版のみに移行した。ハノイにおけるこのような急激な変化が，ベトナム全土におけるクォックグーのヘゲモニー確立に決定的な作用を与えたことは明らかである。

こうした書記言語の切り替えが当時の知識人にどう受け止められたかを知ることは難しいが，いくつか指摘できるポイントがある。上述の新聞紙上にはクォックグーの利点を強調して学習を呼びかける記事がし

ばしば見出されるが，注目すべきは論点がクォックグーの普及そのものから漢文の地位へと移行していく点である。初期の『大南同文日報』にはラテンアルファベットの字形の解説から始まるクォックグーの教本が連載されており，当時の読者層がクォックグーをほとんど理解しなかったことが推測できるが，『燈鼓叢報』以降の記事はすべてクォックグー読者層が存在すること自体は自明の前提としている。しかし『燈鼓叢報』と『南越官報』にはごく一部にチュノム文による記事があり，クォックグーが当時なおベトナム語表記の唯一の選択肢ではなかったことを暗示している。一方『南越公報』(1910年7月10日付)には北部におけるクォックグーの公用化を命ずる理事長官通知が転載されているが，そこではクォックグーの採用が漢文の廃絶を意図したものでないことが強調されており，むしろ漢文知識人層の不安感を払拭しようとするところに力点が置かれている。のちの『南風雑誌』における漢文論争につなげて考えてみると，実際の言語ヘゲモニーの移行とちょうど反転する形で書記言語に関するメタ言説の焦点が移動していくさまを読み取ることができる。

第226回　2006年2月22日
「カリブ海とインド洋のフレンチ・クレオールについて――マルチニック，ハイチ，モーリシャス，レユニオンの事例に即して」

恒川邦夫

例会での談話は，文字に起こして大幅に補筆したうえで，論説として本誌に掲載させていただいた。

第227回　2006年3月15日
「私たちの愚かさについて」

Rainer Habermeier

本発表では〈愚かさ〉およびこれと対立する〈知性〉について，さまざまな観点から考察した。原稿に大幅な加筆・修正を施したものを，同じ題で本号に論説として発表した。

第228回　2006年3月15日
「材源研究と本文批評
――シェイクスピアの『リチャード三世』を巡って」

山田直道

シェイクスピア劇のソースとは，書く際に下敷きにしたとされる外在する先行文書とする立場と，作家の想像力とする立場があるが，シェイクスピアが素材を料理し味付けすると考えれば立場の違いは解消する。問題はソースの収集からその利用法の解明まで，幅広の材源研究のなかで，全編的な作者の意図をどう突き止めるかとなるが，作者は理由なく主材源から逸脱することはないと考え，主材源と作品との比較から具体的な違いを洗い出し，なぜシェイクスピアは材源に従わなかったのかを考察した。

そこで，材源と作品の比較であるが，仮に主材源が分かっていても比較対象の本文に選択の余地がある場合，どの本文と比較するのが良いかという問題が生ずる。書誌学的本文研究の最新の成果をふんだんに取

り込んだ定評あるエディションと比較するのは，劇作のメカニズムを探るには適切でも，もともと本文に良し悪しがある場合は，作者の意図を摑もうとすればするほど隔靴掻痒の感を免れ得ない。そこで考えたのがsubstantive texts との比較である。それぞれの古版本の最初の版本に立ち戻り，本文の違いに応じて作者の意図がどう変化するかを主材源との個別の比較によって明らかにし，よりクリアに意図を実現していると思われる本文を選ぶことはできるのかを見てみようと考えた。

書誌学的本文研究と固く結びついている本文批評を材源研究と並列するのには当然のことながら違和感は否めないが，材源研究によって作者の意図が仮に明らかになれば，相対的な本文の良し悪しに関わる知見が得られる可能性があると考え，具体的に二種類の substantive texts をもつ歴史劇『リチャード三世』を材料に，主材源である R. Holinshed の *Chronicles* (2nd edn. 1587) の該当する記述と第一四折版 (Q1, 1597)，第一二折版 (F1, 1623) の該当するパッセジとを各々比較し，作者の意図が垣間見えるかどうか，見えるとした場合，二版間でどう違いが生じるのか，慎重に材源研究から本文批評へと考察を進めることにした。

今回は，いわゆる「求愛の場」(Wooing Scene) に含まれ，Q1 になく，F1 のみにある第1幕第2場156行から167行（グローブ版）に至る12行を検討対象とした。主材源のホリンシェッドの『年代記』にはヘンリー六世の葬儀がどう執り行われたか記述されているが，シェイクスピアは Anne を随行させ，そこに Richard を登場させて二人の間に激しい舌戦を引き起し，最終的にはアンに対して求愛を成功させるリチャードを創造している。そして，棺をチャーツィーへ埋葬する仕事をリチャードに任せてアンが退場した後，リチャードは棺をホワイトフライアーズに埋葬するよう変更してアンへの約束を早速破るのである。従って，作者は主材源を逸脱し，アンとリチャードの人物関係を創造し，ヘンリー六世の遺骸の埋葬という筋書きにリチャードのアンに対する求愛の筋書きを考案して重ね，リチャードの偽りの求婚を真実と見誤るアンを創造していると考えて良いだろう。そして求愛の後半で F1 のみに見られる12行のパッセジを綿密に見てゆけば，弟のラットランドがクリフォードに殺されるときの呻き声を聞いてヨーク公とエドワードは泣いたとする前半の内容はホリンシェッドに該当する記述がなく，また，アンの父のウォリック伯爵がヨーク公爵の最後を悲しく語り，言葉に何度も詰まりむせび泣いたとき，そばに居合わせた者も涙で頬を濡らしたとする後半の内容もホリンシェッドにはなく，作者の創造であることが判明する。主材源にないそうした内容を作者は創造し，それぞれ悲しみでは泣かなかったリチャードを描いた後，それでもアンの美しさには涙を流し目が見えなくなるというリチャードの台詞を創造して，作者は12行の直前の2行に論理的に内容を結びつけていると考えられる。F1 だけにあるこの12行を創造する作者の意図が，それ以前に4回，それ以降に1回繰り返されている「アンの美しさの強調」にあるとすれば，直前の2行と12行がセットとなって連続している F1 の本文の方が，12行が欠落したために「あなたの目は私の目を涙で辱めている」という意味にとどまり，それでも涙を流させる

のはアンの美しさなのだという論理が続かないQ1の本文に比べれば，作者の意図により一層沿っている本文と考えて良いだろう。

作者の意図を重要と考えるのは書誌学的本文研究では当然のことであるが，材源研究によって作者の意図を推論し，それに相対的に沿っていると考えられる本文を作者の書いた本文に近いと措定できるのではないか。その仮説に基づけば，『リチャード三世』の1幕2場156行－167行のF1-onlyの本文は，Q1の同じ箇所の本文よりも作者の意図に沿っていると考えられるのである。